

京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”とその近郊海域へのハシボソ ミズナギドリとオオミズナギドリ（ミズナギドリ科）の漂着

久保田 信

Puffinus tenuirostris and *Calonectoris leucomelas* (Procellariidae) washed ashore in
“Kitahama beach” at the Seto Marine Biological Laboratory, Kyoto University
and its adjacent waters in Wakayama Prefecture, Japan

Shin Kubota

京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所（〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町459）

はじめに

純海洋性の海鳥ハシボソミズナギドリ
Puffinus tenuirostris は太平洋を一周する旅鳥で、
タスマニア周辺の島嶼が繁殖地である。そこから成鳥は3月下旬から4月上旬にかけて、幼鳥はそれより1ヶ月遅れで、数十万羽ほどの群れで北へ向かって移動する。やがて赤道を越えて我が国の太平洋岸をかすめ、ベーリング海へ到達し、北アメリカへ回った後で南下する。こうして太平洋の数万 km もの長距離を約半年間でほぼ一周し、タスマニアにもどって繁殖する渡りを毎年繰り返している(中西, 1990; 岡, 1996)。ハシボソミズナギドリは海洋の表層の動物を捕らえて食べているが(岡, 1996)、繁殖地での餌不足で渡りの初期に餌を十分にとれず栄養失調に至ったため(中西, 1999)、あるいは気象条件が悪く飛行・移動が妨げられ、疲労も激しいなどの理由で衰弱し、京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”とその近郊海域へ一年の内で一定時期の5月下旬から6月初旬にかけて、しばしば漂着する(久保田, 2006a, b)。“北浜”での漂着生物の観察とその近郊の瀬戸漁港での生物観察は前

世紀末から毎日のように実施しており、今回、近年の(2001年から2012年5月末までの)ミズナギドリ類の記録を、上述した前報の簡潔なまとめとあわせて報告する。

ハシボソミズナギドリの京都大学瀬戸 臨海実験所“北浜”とその近郊海域 の漂着記録(*:本報告)

2001年1羽落下(久保田, 2006a)

2003年5月19日(津村, 2006)

2005年5月22日—5月31日: 5羽
(久保田, 2006a)

2006年5月20日—6月7日:

少なくとも17羽漂着(久保田, 2006b);

29羽漂着(津村, 2006)

*2008年5月24日1羽漂着

*2009年5月23日1羽漂着(図1)

*2012年5月24, 27日2羽漂着(図2)

上記の様に瀬戸臨海実験所“北浜”とその近郊においてハシボソミズナギドリの漂着は毎年

見られないが（あっても大量ではない）、漂着の初日は過去 10 年間では決まって 5 月 19 - 24 日である。



図 1. 2009 年 5 月 23 日に京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”に死亡漂着したハシボソミズナギドリ（幼鳥）



図 2. 2012 年 5 月 24 日に京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”に死亡漂着したハシボソミズナギドリ（幼鳥）

一方、オオミズナギドリ *Calonectoris leucomelas* が、これまで 1 度だけ本調査地域に漂着したので記録する（図 3）。



図 3. 2011 年 6 月 13 日に和歌山県白浜町番所崎先端の磯に死亡漂着したオオミズナギドリ

謝辞

和歌山県環境生活総務課自然環境室主事の谷脇智和氏に写真での同定並びに有益な情報を頂いたので深謝致します。

引用文献

- 久保田 信. 2006a. 鳥と亀の受難. pp. 168 - 169, 図版 53. In “宝の海から-白浜で出会った生き物たち”. 紀伊民報, 和歌山県.
- 久保田 信. 2006b. 和歌山県田辺湾周辺海域へのハシボソミズナギドリ（ミズナギドリ科）の漂着. 漂着物学会誌, 4: 43-44.
- 中西弘樹. 1990. ハシボソミズナギドリの死骸の大量漂着. pp. 139-141. In “漂着海流の贈り物”, 平凡社, 東京.
- 中西弘樹. 1999. 動物の漂着、鳥類. p. 137. In “漂着物学入門”, 平凡社新書, 東京.
- 岡 奈理子. 1996. ミズナギドリ類. pp. 21-25. In “日本動物大百科. 第 3 巻, 鳥類 I”. 平凡社, 東京.
- 津村真由美. 2006. ハシボソミズナギドリ *Puffinus tenuirostris* 2006 年 ~エンペリザメールから~いっぴつ啓上, (94): 7.